慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	良寛のこと
Sub Title	On Ryokan
Author	菅沼, 貞三(Suganuma, Teizo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.39 (1961. 3) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	Hitherto Ryokan has been regarded as a man of many eccentricities, and a good calligrapher and an excellent poet as well. But his true value lies in the fact that he was a priest of Zen in its true sense. He performed his religious practice in complete self-renunciation, so that he was able to live in a true freedom of mind. I tried, in this article, to investigate the essence of Buddhism represented in the doctrine of Zen Patriach Dogen, following the deep intention of Ryokan's thinking among his calligraphs and poems which reveal his religious enlightenment.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000039-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

良寛のこと

菅沼貞三

今年は良寛逝いて百三十年にあたるので、この春根津美術館で記念遺墨展が開かれた。生国越後をはじめ殆ど全国にわたる所蔵家から代表的作品があつめられたので、見ごたえのある展観であつた。私はこころひかれて三度行つてこれを鑑賞した。

良寛の書は短歌と漢詩と書簡などに、或は掛幅装、或は巻子装または屏風などに仕立てあつて、その多くのものは、草書体の容易に読めない文字で書かれてあるが、いずれも漂々とした美しい文字が連らねられている。それは平安朝の草仮名を見るような、気品の備つた書で、草書風に書かれたもののうちにあつて、随分と張りのある筆鋒がうかがわれる。一見稚拙のように無雑作に書かれた文字のうちにも、よくよく見ると何ら屈托のない自由さが蔵せられている。気取つたところや気構えたところがなく、伸び〴〵と書いて、実に清々しい感銘を与える。この気品のある漂々とした書はいつたいどこから生れて来たものであるか。

従来良寛の書のよさのよつてくるところは、良寛の書の習練のうちに、古法帖の臨摸のことがあげられる。たとえば良寛の書簡の記事から、道風の秋萩帖や和漢朗詠集、また王羲之や懐素の自叙帖などから学んだことが知られている。いかにも良寛の書には、道風や懐素あたりの影響がみとめられるが、しかしかかる和漢の古法帖の臨摸を行うた

のみで、あのような漂々と美しい書がうまれてくるとはいいきれない。良寛その人のもちあじが出ている。書は人なりという消息が、良寛の書には如実に、その人となりのよさが浸み出ているのである。

それならば良寛の人となりのうちに、どうあらわれているかといえば、良寛の書は彼の在世年代（十八世紀後半から十九世紀前半にかけて）のうち、越後へ帰国した後のものが最も多くのこされているので、彼の四十歳以後即十九世紀前半のころ、当時の文人達、頼山陽、田能村竹田、亀田鵬斎などの書と比較してみるとわかる。そのうち竹田は明清の文化が身についての教養がうかがわれ、鵬斎などは江戸からはる〴〵越後へ来て、良寛に遭つてその書にすつかり傾倒してしまい、それ以後の書は、前とそつくり変つて、良寛の書のように読み難くなつてしまつたといわれる程であるが、良寛の書のように清々しい点はない。その点山陽も同様にその当時のいわば江戸時代相のくさみがついている。しかし良寛の書になると時代のくさみがない。時代放れのしたよさが存している。いえば平安朝の草仮名をみるような典雅な品格が備つている。良寛は江戸の文化文政時代に、北越の一隅に、極めて窮乏の生活に住していたのであるが、あたかも平安朝の貴族の有しているような気品さを蔵していたともいい得られる。しかし良寛の歌は古今集ごのみではなく、万葉集によつている。歌にもまた時代を超越したよさがうかがわれる。良寛在世当時の越後人、解良栄重の書いた「良寛禅師奇語」の中に「余問フ歌ヲ学ブ何ノ書ヲヨムベシヤ」師曰「万葉ヲヨムベシ」余曰「万葉ハ我輩不可解」師曰「ワカルダケニテ事足レリ」時に曰「古今ハマダヨイ、古今以下不堪読」と記している。その万葉集も良寛は人から借りて読み、その中からその真髄をちやんと把握している。しかも万葉を学びつゝ良寛らしい歌をよんでいるのである。このことは良寛が他の人から借りて習つた古法帖を学びつゝも、良寛その人の書になりきつているのと同一である。

良寛の歌については、夙に斎藤茂吉がその著「良寛短歌抄」録で評訳し、近くは吉野秀雄氏は「良寛和尚の人と歌」の中で評論している。良寛は歌にかぎらず、漢詩や書簡や伝記など、従来幾種となく刊行され、近頃はまた東郷豊治氏編著の「良寛全集」やその著「良寛」などで詩歌や人となりについて明かにされてきているし、書についても酒井千尋氏のように永く研究されているので、今更私どもがとくまでもないが、従来の良寛研究の諸家が比較的不問に附し、ことに東郷氏などは、そのことにふれたものに対して、ピント外れとまで酷評している点が、実は良寛を知る上に、もつとも看過してはならぬ点と私には思われるので、その点についていささか記しておこうと思う。

良寛は書とか歌とか、その境涯を端的に示す詩のよさもあるが、それらをおしなべて、よき芸術をものした人ということより以上に、良寛は禅宗の僧侶であつたということ、それがたゞの坊主でなく、大悟徹底した立派な禅僧であつたということ、この点を不問にしては良寛のよさは解る筈がないと私には思われるのである。

斎藤茂吉は「良寛和尚雑記」で、その歌を評釈した中に、漢詩を三、四首かかげて「詩はどうも予にはわからない」と云うて次の詩をあげている。

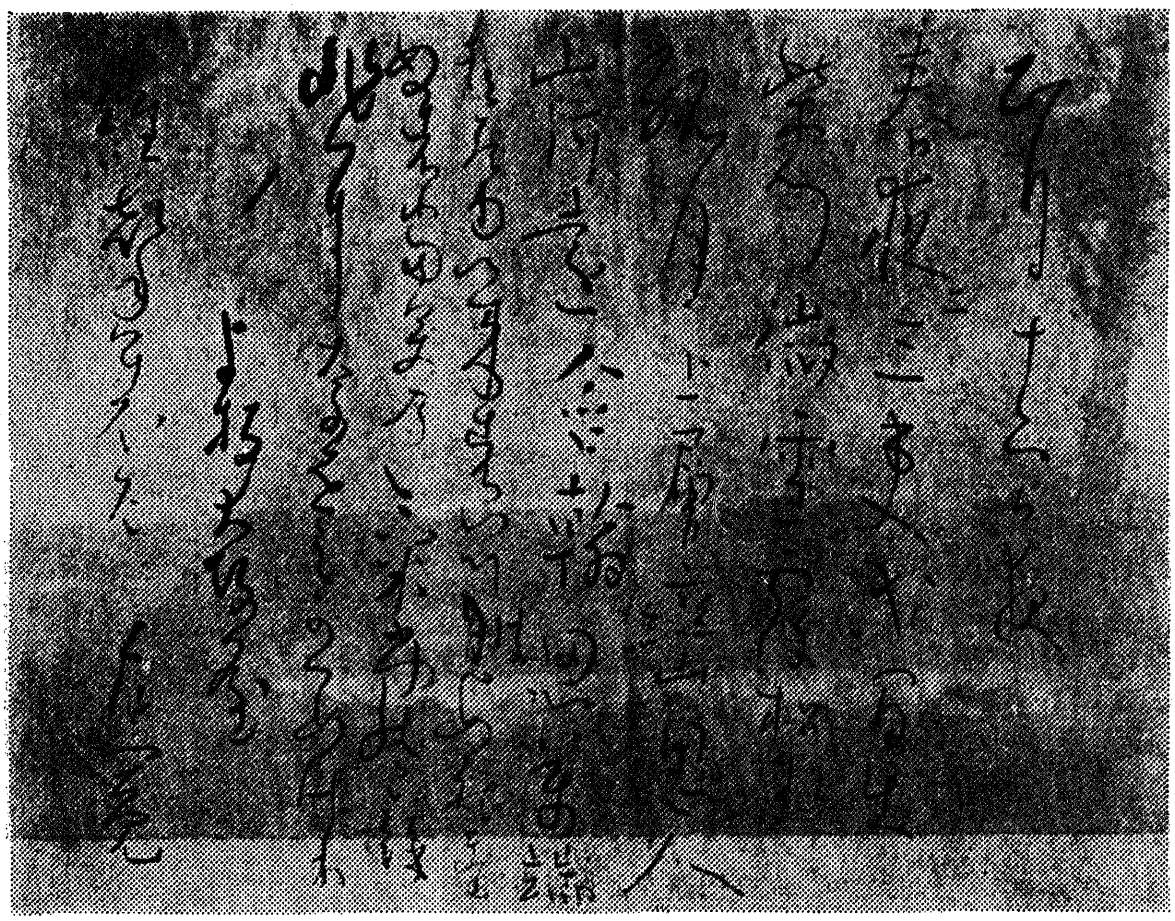
千峯一草堂　終身粗布衣　任生口辺醍　懶掃頭上灰
已無銜花鳥　何有当鏡台　無心逐流俗　任人呼癡獣

云うまでもなく、これは碧巌録の夾山の開山善会禅師の句に「鳥啣花落碧巌前　猿抱子帰青嶂後」とあり、また六祖恵能の有名な偈に「菩提本非樹　明鏡亦非台　本来無一物　何処惹塵埃」とあることより引いて、もつぱら沈黙して口辺に醍の生ずるに任かせ、頭上の灰を掃うこともせず、坐禅弁道する身は、流俗を逐わず、人の癡愚と呼ぶのにまかす、と禅僧良寛の境涯をうたつたものである。人の癡愚と呼ぶのにまかすとまで徹底した心境に達するのは容易

ならざることを思うべきである。

また「生涯懶立身　騰々任天真　嚢中三升米　炉辺一束薪　誰問迷悟跡　何知名利塵　夜雨草庵裡　雙脚等閑伸」この詩句のうち「騰々として天真に任す」ここに大悟して何等の屈托もない良寛の面目が髣髴としているのである。なおまた「城中乞食了　得々携嚢帰　帰来知何処　家在白雲陲」

この詩を読んでもわかるように、良寛は歌よみとか詩人である前に、すでに名利をすてて、孤貧の中に徹した、まことに脱落身心の人であつたことが知られる。良寛の伝記をみると安永八年（一七七九）二十歳の時出家して、玉島の円通寺住職大忍国仙が北越勧化に来つて、これに従いはる〳〵備中の玉島に赴いて坐禅弁道したと云う。この秋、私は塾生の見学旅行に随伴して、倉敷まで行つた途すがら、玉島の円通寺を訪れた。寺の丘上より浪静かな瀬戸内海が遠望され、眼下には玉島の町並が眺められた。良寛の詩に「従来円通寺　幾回径冬春　門前千家邑　乃不識一人　衣垢手自濯　食尽出城闉　曾読高僧伝　僧可可清貧」とあるが、北越より遙る〳〵この備中の海辺に来り、一人の知友もなく、孤貧のうちに、修業した若き日の良寛の寂寥がひしと感じられた。而して寛政二年（一七九〇）三十三歳の時、良寛は遂に廓然と大悟し師国仙から印可をうけたと云う。その時国仙の偈頌に「良也如愚転寛　騰々任運得誰看　為附山形爛藤杖　到処壁間午睡間」とあるが、良寛が大悟の人であつたことは次の彼の詩句のうちに、まさ〳〵と認知することが出来る。「大道元来没程途　不知何処是本期　認境趁境々愈遠　迷心覚心々却非　仮説空有誘諸子　縦契中道終堕岐　我這些子妙不伝　裁掛歯牙為支離」このうち「我がこの些子の妙は不伝、わずかに歯牙にかくれば支離となる」の句は大道の真髄をよくぞ云い得たものと云えよう。良寛はその師国仙と共に道元の流を汲む曹洞の禅家であつた。彼の詩に、「読永平録」と題する中で、「憶得疇昔在玉島　円通之先師提示正法眼　当時已有景仰意　為



良寛の書

請拝閲親履践　始覚従前漫費力　由是辞師遠往返
嗟々永平有何縁　到処逢着正法眼」云々とあり、
また「一夜燈前涙不留　湿尽永平古仏録」とおそ
らく道元の「正法眼蔵」を読んで感激し、涙で古
録を湿したことを詠じているのである。良寛はた
ゞに正法眼蔵を読んで感涙し、これを心奥にのみ
止めていたのでなく、徹底その行履の中に、実践
躬行した人であつたのだ。禅は概念的の知解では
ないのである。

良寛の行履を示すには、宗門で三毒といわれる
貪・慎・痴がすつかりぬけきつていたことがわか
る。良寛が貪欲から離れていたことは、「盗あり、
国上の草庵に入る。一物の盗み去るべきものな
し、密に師の臥褥をひきて奪はんとす。師寝て知
らざるものの如し、自ら身を転じてなすがままに
まかしたりきといふ」良寛伝の小話をみてもわか
る。良寛の句に「焚くほどに風がもてくる落葉哉」

円通寺より玉島俯瞰

とあるがその凉風のごとき心境はまた、自分の持物に「おれがの」とか「ほんにおれがの」と書いたといわれているが、これは自我に執着しではなく、一人のおれではなく、万人に通ずるおれであり、持主が変れば変つた人のおれがになるのである。この融通無礙の境涯は実に尊い。また慎恚の情から離脱していたことについては、月夜に芋畑を散策していた良寛が芋盗人とまちがえられて、打擲されたにもかかわらず、一言の弁解もせず打たれるままにまかしたその度量や人の痴愚と呼ぶに任す雅量の寛さはまつたく頭の下るものがある。これは道元の「学道の人須からく、吾我をはなるべし」とか「学道の人よろしく貧なるべし」といわれた言葉を良寛はそのまゝ体得していたということが出来る。

道元の宝慶記に「参禅は身心脱落なり、祇管打坐するのみ」とか「仏々祖々の身心脱落を弁肯する乃ち柔軟心なり」とある。中国禅林の中で、誰かが道元に向

つて「貴僧は何を得て帰られるか」と問うたら「さようまづ柔軟心とでも申そうか」と答えたとあるが、その柔軟心を良寛は体得していたということが出来る。この柔軟心とは語句上のことでなく、概念や観念的のことでなく、脱落身心そのものであり、いいかえれば大悟徹底の真意に外ならぬのである。この良寛の柔軟心が、歌となり詩となり、書となつたものと見得られるのである。またこの境涯に立つておつたればこそ、維馨尼に宛てた詩の「春夜二三更等閒出柴門　微雪覆松杉　孤月上層巒　思人山河遠　含翰思万端」などや貞心尼の訪れにうたつた「いついつとまちにし人は来りけりいまはあひみて何か思はん」という歌にみる温い心情が発露していつまでも我々のこゝろをうつものがある。

良寛が生死に対するこゝろとして、彼の書簡の中に、たしか三条の地震見舞の文中に「災難にあう時節には、災難に逢うがよく候死ぬる時節には死ぬがよく候、是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候」とあるが、これなどは大悟徹底したものでなくては得られぬ境涯である。良寛の永平古仏、道元からうけついだ曹洞の禅風は、世のたとえに「臨済将軍、曹洞土民」というように、威圧することなく自由無癡のいわば柔軟心の境に行履していたのである。良寛が国仙の家風を人に語つた言葉に「一に石を曳き、二に土を搬ぶ」とあるように、良寛は道を得て実践躬行した稀による禅僧であつたのである。真の禅僧とは、いわば常に柔軟心を保持しているもののことである。この柔軟心にこの身このわが心が同一でなくては、真実に良寛を理解したとはいい得ぬのである。わが心底がこの柔軟心になりきるには、概念的知解を去つて、まず実践躬行の見性悟道しなくては得られないのである。良寛を知ることは、実に容易ならざること亦思うべきである。良寛の境涯については語るに尽きぬ程であるが、彼の戒めの言葉に「心あさく思わるゝものは、神仏のさたする。しらぬみちのことをいふ。さとりくさきはなし」とあるが、私が以上のようなことを記した

ことは、すでに良寛の擯析をかうことに陥つてしまつたのである。附記して大方の叱正に委ねる。

（一九五九・一一）